

20089

ステント delivery 中にステントフラクチャーを起こした 1 症例

【はじめに】近年、PCI デバイスの性能向上により、病変部へのデバイス通過性能は向上している。今回、ステント delivery 中にステントフラクチャーを起こした症例を経験した。【症例】64 歳、男性。原疾患 UAP。【経過】Target lesion #6 long75%、#7 75%、75%。LAD ヘワイヤー挿入後、IVUS を施行し、石灰化を伴う病変を認めた。続いて#7、#6 の病変部にバルーンで前拡張し、#7 ヘステント挿入を試みたが#7 の病変部を通過できず、POBA を追加するもステント不通過。その後、buddy wire にするも今度は#6 からステントが挿入できず、ステントシステムを体外に出すとステント proximal edge のフラクチャーを認めた。この時 X 線透視画像でもステントに異様な画像を認めた。その後、#7、#6 ヘステントを変更し留置した。【考察、結語】フラクチャーの原因としては石灰化病変部との過度な接触によるもの、もしくはガイドカテーテルの先端チップに引っ掛かりが生じた可能性が考えられるが、ステントをガイドカテーテル内に引き戻す際に抵抗感を認めず、前者が原因である可能性が高いと考えられた。近年、ステントシステムも柔軟性、到達性能などが向上しているが、プラーク性状や、血管の蛇行などで標的部位にデバイス挿入が困難な場合もあり、デバイス選択と共に適切な lesion preparation を行うことが重要であると考えられた。また、本症例では X 線透視画像でも異様な画像を認めており、我々は手技に難渋しているときこそ、注意深く観察し、異変が起こった際に早期に気づき医師をサポートしていかなければならない。